



日本動機づけ面接協会 (JAMI) 第10回大会

プログラム・抄録集

日時◆2022年3月12日(土) 14:00~17:00
3月13日(日) 14:00~17:00

会場◆オンライン

主催◆一般社団法人日本動機づけ面接協会 (JAMI)

ご 挨拶

第 10 回日本動機づけ面接協会年次大会の開催にあたって

原井クリニック
原井宏明

コロナ禍の収束が見越せない中、第 10 回大会も昨年に引き続き、オンライン開催となりました。ソーシャル・ディスタンスという言葉が不要になるのはまだ先のようにです。一方、物理的接近が難しくなった分だけ、言語的コミュニケーションの重要性が増してきたようです。コミュニケーション技術を改善する方法としての動機づけ面接の有用性が多方面から認識されるようになり、習得する機会がほしい、技能を評価をしてほしい、さらに IT 技術と組み合わせたい、という依頼をよく聞くようになりました。

JAMI の代表理事である私としては、こうした依頼に応えることは責務の一つです。同時に自分のアイデンティティを行動療法家としている人間としては、言語とは何か、行動と同じなのか違うのか、今ここでキーボードで叩くと画面に出てくる黒い滲みはシンボルか、言語か、行動かとあらためて考えてしまいます。今回のプログラムはいつもより基礎的な話題になります。AI を専門にする理工学研究者と行動分析学の研究者・臨床家をお招きしてこうした疑問に答えを出す機会になるようにいたしました。これがみなさんの疑問とも重なってほしいと願っております。一般演題には社会的包摂と小児の肥満治療の 2 つをいただきました。ディスカッションが十分にできるように時間を長めに確保しています。また JAMI のトレーナー技能検定についてもお知らせすることにしてあります。ぜひ、多くの方にご参加いただけますよう大会長としてお願い申し上げます。

プログラム

・3月12日(土)

1日目

14:00 大会長挨拶 原井宏明 (原井クリニック)

14:10 一般演題1

14:40 一般演題2

15:10 休憩

15:20 講師紹介

15:30 講演 中野有紀子 (成蹊大学理工学部)
「社会的信号処理に基づくコミュニケーション支援」

16:40 JAMI からのお知らせ「トレーナー検定について」

17:00

・3月13日(日)

2日目

14:00 講師紹介

14:10 特別講演 坂上貴之 (慶應義塾大学文学部)
「行動分析学への招待」

15:00 休憩

15:10 シンポジウム 「動機づけ面接と言語行動分析」

パネリスト

奥田健次 (学校法人西軽井沢学園)
「ユーモアを使った「反いじめ」アライアンスプロジェクト」

原井宏明
「動機づけ面接の研究者と行動分析学」

指定討論者 坂上貴之

16:55 閉幕挨拶

17:00

3月12日(土)

<一般演題>

1、社会的包摂を進めるには?～その背景とAIを用いた言語を超える試み～

筆頭発表者

カトリック麹町 聖イグナチオ教会 青木世識

共同発表者

東北会病院 齊藤健輔

筑波大学 沢宮容子

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、人類が世界各地で以前から抱えてきた諸問題が顕在化している。

分断や孤立、武力による対立や衝突、さらに、地球温暖化や飢餓、困窮や差別等は、人類が英知を結集し、言語を越えた協力に基づいて、ともに乗り越えなければならぬ課題である。

例えば、米国におけるBlack Lives Matter、アジア人差別、米中間対立等はその一例としてあげられるであろう。

我が国においても、対人援助職の「燃え尽き」のみならず、少子高齢化が将来にもたらす影響、モラル崩壊の進行等が危惧されていることは周知の事実である。

換言すれば、人類がこれらの諸問題をともに解決していくためには、言語や文化を超えて、絶えず世界規模で対話を継続する必要性が日々増しているといっても過言ではない。

従って、本発表においては、これらの諸問題を概観し、社会的包摂の視点から、AIを用いた言語を超えるコミュニケーションの試みについて、その重要性と発展可能性の提起を行いたい。

一例として、国際ネットワークであるMINT (Motivational Interviewing Network of Trainers) の活動紹介を行い、可能であれば、SDGs (持続可能な開発目標)、TIC (トラウマインフォームドケア) といった社会的変革を要する視点からも、考察を加えたい。

2、小児肥満診療における動機づけ面接とセルフモニタリングの融合について

和泉市立総合医療センター 小児科 坂東賢二

【背景】小児肥満診療ではドロップアウト（D0）の多さと治療への動機づけの低さが課題である。当院の2018年から2年間の治療成績からMIはD0の減少（介入1年時のD0率が約18%）には寄与するが、肥満度の改善が課題であった（投稿中）。

【目的】当院肥満外来のMI+セルフモニタリング（日記）の併用効果を検討すること

【対象と方法】2020年初診の小児肥満37例（6～14歳、中央値9歳）の日記の使用状況と肥満度の推移を診療録を用いて検討した。

【結果】MI+日記（A群）：17例、MI単独（B群）：20例。年齢、肥満度、通院日数に群間で差は無かったが、肥満度の平均値の変化は初診時→最終受診時で、A群44.4→44.0%、B群：43.6→38.8%となり、B群のみ有意な改善を認めた

（ $P=0.02$ ）。37例の介入1年後のD0は8例（21%）であった。A群のうち12例は2回目以降の面談で日記を提案しており、初診時に提案した5例と比べ、日記の継続率が高かった。B群では、関係性を構築する段階で、行動変容に向かいそうな症例では日記を提案していない傾向がうかがわれた。

【考察と結語】行動療法をMIに融合する際も関係性を重視する姿勢はD0を増やさず、日記の継続にもつながっていた。MI単独でも有意な改善を認める症例も多いことがわかった。

<講演>

「社会的信号処理に基づくコミュニケーション支援」

成蹊大学理工学部 中野有紀子

社会的信号処理とは、人同士や人对コンピュータの社会的インタラクションを分析・理解する計算モデルを機械学習により構築し、これを応用しようとする研究分野である。ハンドジェスチャ、姿勢、表情、視線、音声情報等、社会的インタラクションにおいて人が無意識に表出する行動データ（社会的シグナル）を分析対象とし、感情、性格特性、コミュニケーションスキル等の会話参加者の特性やインタラクションの特性を予測・推定する学習モデルが数多く提案されている。また、分析対象となるデータを得るために、ミリ秒単位での行動データを計測したマルチモーダルコーパスの構築も進められている。本発表では、社会的信号処理の研究手法を解説し、いくつかの研究事例を紹介するとともに、これを応用したコミュニケーション支援技術として、可視化技術や会話ロボットの研究について紹介する。

<トレーナー検定について>

2022年度からトレーナー技能検定を開始する。この10年間でMI学習者は急増し、学習者同士のコミュニティも各地で立ち上がった。裾野が広がった一方、日本におけるMIの技術向上、効果研究、トレーニング研究を担う人材はまだ少なく、トレーナーとしての技能を継続的に評価する体制は整っていない。

日本だけでなく、世界組織であるMotivational Interviewing Network of Trainers(MINT)も同様の課題を抱えている。

組織が大きくなるにつれて、トレーナー同士で情報交換する場から資格認定の場へと機能が変わってきている。

Training New Trainers (TNT)に参加するだけでトレーナーとしての技能が保証できるのか、という疑念が残る。

JAMIのトレーナー技能検定ではトレーナーとしてのさまざまな技術が一貫して発揮されていることを重視する。

トレーニングの質だけでなく、技術向上のための日頃の努力も評価対象とし、5年ごとの更新制とした。

3月13日(日)

<特別講演>

「行動分析学への招待」

慶應義塾大学文学部 坂上貴之

行動分析学は、実験心理学、特にヒト以外の動物を対象とした学習及び行動の研究から出発した。この出自からも明らかなように、行動分析学では、乳幼児を対象とする発達心理学と同様、言語を媒介とした実験的方法に頼らない。したがって、言語報告を観察データを中心に据える他の領域の心理学や精神医学、特に認知心理学や人間性心理学、そして精神分析学と異なる道を行動分析学は歩むこととなった。しかしこうした歩みは、行動の原因として心的概念を採用する代わりに、遺伝的資質や生後からの環境との履歴、そして現在おかれている随伴性といった接近可能な因果関係の吟味へとこの学を向かわせたと言える。今やその対象領域は、教育、産業・労働、医療、福祉などといった様々な応用的臨床的領域に広がっている。本講演では、行動分析学の哲学的基盤、その研究法の特徴、得られた基本的な成果とその展開の可能性を中心にお話ししたいと思っている。

<シンポジウム> 動機づけ面接と言語行動分析

企画について：

1902年はカール・ロジャーズが生まれた年である。では1904年は？答えはBF スキナーである。ロジャーズと聞けばパーソンセンタード(クライアント中心療法)が出てきて、動機づけ面接と結びつけることができるだろう。ではBF スキナーと聞くと？人によっては徹底行動主義と答えるだろう。このシンポジウムでは動機づけ面接の文脈のなかではあまり触れられないスキナーの業績、主義主張を取り上げ、行動を変えることへの理解を深めたい。演者としては自閉症児に対する療育で知られ、近年は小学校の設立を目指しておられる奥田健次先生と原井自身、指定討論者として日本行動分析学会の前理事長であり、日本心理学会の現理事長である坂上貴之先生にお願いしている。

「ユーモアを使った「反いじめ」アライアンスプロジェクト」

学校法人西軽井沢学園 奥田健次

近年、学校におけるいじめの認知件数は大幅に増加し続けており、それによる悪影響は社会的問題となっている。いじめ自殺や被害者による反撃といった悲劇すら生じうるが、こうした事件にならなくてもいじめが全体の学力低下（AERA, 2013; Nansel et al., 2001; Juvonen et al., 2011; Buhs & Guzman, 2007; Wang et al., 2014; Cohen & Freiberg, 2013; 米国教育省, 2013）を招くことが知られている。

暴力のような危険な行為に対しては適用できないが、言葉による嫌がらせやいじめに対する対処法の1つにユーモアを使った方法が注目されている。Davis and Nixon (2014) の調査では、児童生徒が「もっとも助けとなったアクション」としたのは「それについて冗談で返すこと」であった。相手を避難したり言い返したりするような対応をせず、児童生徒の年齢に合った冗談やユーモアを活用することが推奨される（コーエン=ポージー, 2016; アーンスパージャー, 2020）。今回は、主に大学生を中心に開始したユーモアを使った意地悪な言葉への切り返しの技法の例と、その効果や可能性について紹介する。

「動機づけ面接の研究者と行動分析学」

原井クリニック 原井宏明

動機づけ面接と行動分析学は並べて論じられることがないが、MI の研究開発の歴史のなかでは常に隣同士にいる。たとえば Truax, CB(1966) の論文は MI 関連で必ず引用されるが、これはロジャースの面接をスキナーの理論から説明することを目指した研究である。また MI とはクライアントの自発的な発言の中からチェンジトークを選択的に強化することだと言えるが、これは治療者から「○○しなさい」「○○しよう」という働きかけをしないフリーオペラント技法と呼ぶこともできる。さらに MI 関係者で Miller, WM の名前を知らない人はいないが、Miller 教授は CRA(コミュニティ強化アプローチ) の論文を多数出している。CRA はスキナーの直弟子である Azrin N が開発した応用行動分析の技法である。

この発表では MI を知る人なら誰でも知っている研究者を取り上げながら、行動分析学が彼らの基本になっていることを紹介する。

第 10 回年次大会

主 催：一般社団法人 日本動機づけ面接協会